

# 長崎短期大学における「新型コロナウイルス感染症」感染防止の取り組み

## Efforts to prevent the Spread of Novel Coronavirus Disease (COVID-19) at Nagasaki Junior College

川原 ゆかり、木寺 友紀、滝川 由香里、  
市瀬 尚子、小林 友美子、佐々木 裕

### I はじめに

令和2年(2020年)1月中旬に日本初の「新型コロナウイルス感染症」感染者が確認され、2月1日同感染症が「指定感染症」へ指定された。その後わずか1か月で、長崎県でも初の感染者が確認された。このような中、本学においても1月中旬より2020年度授業開始に向けた学内の感染拡大防止対策について協議を開始し、春休み期間中を利用して様々な感染防止対策を講じ、5月の面接授業を開始することができた。その後は、文部科学省や厚生労働省、内閣府等から次々発出される資料や、明らかになった新型コロナウイルス感染症の知見等から、学生の学習の機会を担保しつつ感染防止を図るためにどのような方法が最適か模索し、修正していくという日々の繰り返しであった。

今回は、本学の感染拡大防止対策を衛生委員会の委員が1年間の取り組みを振り返り、今後の課題について検討する一資料としたい。

### II 新型コロナウイルス感染拡大防止対策の取り組み

#### 1. 国・県の新型コロナウイルス感染拡大防止対策の取り組み(資料1)

2020年1月24日の「新型コロナウイルスに関連した感染症対策に関する対応について(依頼)」という事務連絡を皮切りに、文部科学省から新型コロナウイルスの指定感染症への指定を受けた学校保健安全法上の対応、帰国児童生徒等に対する対応、児童生徒等に新型コロナウイルス感染症が発生した場合の対応、大学等の授業開始等の文書が大学長宛に発出された。

その後感染者が次第に増加し、全国的に感染者が確認されるようになったことを受け、2020年4月7日「緊急事態宣言」が発令され、文部科学省から学事日程等の取扱いおよび遠隔授業や大学の臨時休業、感染拡大防止措置の実施、教育研究活動の実施等についての文書、6月には「新型コロナウイルス接触確認アプリ(COCoA)」が開発され、その周知文書が発出された。

面接授業が段階的に開始されると、感染者やその周囲の人々への差別・偏見も問題となり、これらに関する文書も8月に発出され、また8月に第2波が到来し、新型コロナウイルス感染症の解明も徐々に進み、これまでのマニュアル等の見直しも行われた。

その後も第3波の到来により、1都3県に緊急事態宣言が発令され、新型コロナウイルス等対策特別措置法に基づく緊急事態宣言を踏まえた留意事項についての文書等も発出され、これらの改訂がその都度行われている。

長崎県では、全国の感染者数に比例する形で感染者の増減がみられた。2020年4月1日に小中高の一斉臨時休業についての文書が発出され、公立の小中学校及び多くの大学が臨時休校を一時的に行った。その後感染状況が下降に向かい、5月5日に県立学校にける「5月11日以降の対応について」の文書が発出され、5月11日以降段階的に県下の学校が再開された。

## 2. 本学における新型コロナウイルス感染拡大防止に係る取り組み

以下に本学の教職員に向けた感染拡大防止対策とその実態について述べる。(資料2)

### 1) 衛生委員会の役割について

本来、衛生委員会は労働安全衛生法に基づき、その組織、運営、調査審議などを定め、衛生管理活動の円滑な推進を図ることを目的にしている。しかしながら、令和2年当初から新型コロナウイルス感染拡大防止対策が課題となり、その役割は一変した。そこで急遽、当面の本委員会では、教育の質を保証するための安心安全な学校生活・学生及び教職員の健康管理を命題とした。

また構成委員は、副学長(委員長・心理臨床家)、産業医(長崎国際大学教授)、養護教諭(衛生管理者)、看護職、管理栄養士、事務局職員が所属している。

### 2) 新型コロナウイルス感染症に係る学内マニュアルの作成

#### ①新型コロナウイルス感染拡大防止フローチャート作成

関係省庁から次々に発生される文書を各教職員が読み込むことは業務上困難であり、一目で誰もが理解・対応できるマニュアル作りが必要となり、本学の新型コロナウイルス感染症対策フローチャートを作成した。手順としては、文部科学省や厚生労働省、内務省等の事務連絡文書や外務省海外安全HPなどを参考に、下記の5種類(学生版、教職員版)のフローチャートを作成し、4月1日にmelly(学生への学内連絡用ネットワーク)に掲載した。

(ア) 本学にて新型コロナウイルス感染症患者が発生した場合の対応(教職員版)(資料3)

(イ) 日本国内で新型コロナウイルス感染者(疑い含)と濃厚接触があった場合の対応(学生・教職員版)(資料4)

(ウ) 特定警戒都道府県(後に感染流行地域に名称変更)へ行った場合の対応(学生・教職員版)(資料5)

(エ) 検疫強化対象地域、入管法に基づく入国制限対象地域、レベル3より帰国・入国した場合・またその人と濃厚接触があった場合の対応(学生・教職員版)(資料6)

(エ)は、当初中国、韓国、イタリア等の国に限定されていたが、感染拡大に伴い、外国から帰国した場合に変更された。

また、本フローチャートにおいて、発熱等の有症状時は、登学せずに病院を受診し、医師の許可を得てから登学することとした。さらに体温に関しては、37.0以上ある場合は、登学せず学校に相談してほしい旨を明記した。これは、新型コロナウイルス感染症状として37.0～37.5℃の微熱を呈する場合があります、平熱や随伴症状の有無を慎重に確認したい意図があったためである。この基準は現在でも継続しており、平熱(通常の体温)が36℃台後半の学生も含め、朝の体温が37.0℃を超えた場合は、学校や実習に行かずに(行く前に)、養護教諭・CA(クラスアドバイザー;以下同様)等へ相談することとしている。

本フローチャートを学内で共有したことで、学生・教職員共にどのように対応したらよいか把握することができ、混乱も少なくスムーズに行動することができたという意見を頂いた。

#### ②陽性者・濃厚接触者等が発生した場合の緊急連絡網の作成及び事務職係分担表の追加

全国的に、大学等で新型コロナウイルス陽性者が多発していた時期に、本学でも緊急連絡体制の必要性を感じ作成した。陽性者・濃厚接触者というデリケートな問題なだけに、窓口を保健室とし他部署との連携を図った。また、事務局の部署ごとに下記のように分担を決めた。

- ・総務・会計課：対策本部の設置、教職員勤務体制の判断、法人本部とへの連絡調整他
- ・学生支援課・大学改革推進課：学生生活全般に係る連絡調整・相談窓口の開設 他
- ・入試募集・就職課：ホームページへの公開・オープンキャンパス、入学試験時の対応 他

#### ③体調回復後の登校再開の基準について(資料7)

4月当初、有症状時は受診後医師の許可を得て登校することとしていた。しかし、発熱した学生の場合、医師から許可を得た場合でも夕方からの発熱と朝方の解熱を繰り返すこと等が懸念されるため、大事をとって、

解熱後3日を経たのちに登校可とした。(5月時点)

しかし、学生の不利益を最小限とすることを目的に、6月に解熱後48時間を経過した後に登校可と変更した。

#### ④感染流行地域への移動があった場合の対応(資料8)

本学では独自に感染流行地域を指定している。その条件は1週間以内の新規感染者数(>40人/週)、10万人当たりの感染者数、感染者増加割合などを目安としている。学生及び教職員が感染流行地域への移動があった場合は、2週間の自宅待機あるいは帰宅した後4日目にPCR検査を実施している。年末から1月にかけて感染者の増加がみられた際には、長崎県が感染流行地域となるのではないかと身構えた。もしそのような状況が今後あった場合は、感染流行地域からの流入抑制のために行っている本学の対策(2週間自宅待機ないしPCR受検)の適用を従来のものから変更する必要があることを衛生委員会で確認した。

### 3) 新型コロナウイルス感染症拡大防止に係る啓発活動

#### ①長崎短期大学版新型コロナQ and Aの作成(資料9)

様々な情報がネットやテレビで放映されたが、正確な情報を学生が系統的に入手できる仕組みづくりが必要であると考えた。感染経路や正しい感染予防策についての基礎知識を個々人が理解することが、おのずと集団の感染リスク低減につながるためである。

その仕組みづくりの一つとして、新型コロナウイルス感染症の基礎知識、具体的な感染予防対策、有症状時の対応方法について、なるべく平易な言葉でまとめた「コロナQ and A」を作成し、本学HPやmelly(学生への学内連絡用ネットワーク)上で紹介した。

Q and Aには、官公庁作成のポスターやHPへつながるリンクを貼付し、学生が少ない労力で知りたい情報を簡単に手に入れられるよう、工夫した。

また情報源が乏しくなりがちな留学生が情報を主体的に集められるよう、情報発信時に「NHK WORLD-JAPAN」のQRコードや「やさしい日本語」で書かれた新型コロナウイルス感染症に関する情報ページのアドレス等も発信した。

#### ②健康観察について(資料10)

前期授業開始と共に健康観察をスタートした。学生個々人が健康観察カードに朝夕の検温、症状(頭痛、咳、腹痛、下痢、嘔吐、味覚・嗅覚の有無等)を記入し、2週間でCAに提出、CAは内容確認後保健室に提出するという流れで行った。学生が自分で記入することで体調の変化を早期に把握することができ、ひいては行動の抑制にも繋がったのではないかと考える。認識の低下を懸念し継続的に周知徹底を行った。

また、当初上記の紙面での健康観察を行っていたが、8月からスマートフォンで管理できるN-CHAT(長崎県健康管理チャットサービス;以下同様)に切り替え、毎日、タイムリーにデータ管理を行うことができた。保育学科、介護福祉コースにおいては、学外実習時にも紙面の健康観察カードを活用し、施設との情報共有を行った。

#### ③ポスターの掲示・校内放送

学生が感染拡大防止策をイメージしやすいよう、各省庁で作成された感染防止対策に係るポスターを学内の各所に掲示した。

またそのほかにも留学生が日本語の感染拡大防止対策を理解できるよう、授業の一環として、留学生による日本語の感染拡大防止ポスターが制作・掲示され、目を引く力作であったことから啓発に一躍買っていたと思われる。

さらに、学友会生(含留学生)が、昼休みに校内放送で感染拡大防止を呼び掛けた。留学生が交代で母国語を用いて話すことで、その言語を使用する学生への啓発ができたのではないかと考える。

#### 4) 学内の感染拡大防止のための環境整備

##### ①授業の調整

2020年2月末から、授業内での感染拡大リスク低減のための対応方法について、衛生委員会を中心に各授業担当教員・教務委員会・事務局等と調整を行った。

講義は、教室定員の50%未満の人数で実施することとし、それが困難な場合は教室変更や遠隔授業で対応した。

演習においては、動線も含めた演習の流れを理解した上で、消毒の方法・タイミング、ゾーニング、演習の流れを考える必要があり、調整に時間を要した科目もあった。

各授業担当教員が学生の学びの機会を確保することを念頭におきながら、可能な限りの感染防止対策を模索したことで授業を開始することができた。

例えば、オペレッタの授業では、飛沫感染防止対策として、屋外での練習、人がいない方向を向いて歌を歌う、東京混声合唱団が考案したマスクを使用する等の感染対策を講じつつ、学生の学びを確保することができた。また例年100食以上の大量調理を行う給食経営管理実習では、前期は所属コースの学生・教員のみを、後期は所属コース学生および全教職員を対象として実習を実施し、密を避けるために教職員には研究室等を利用した喫食をお願いするなどの工夫も行った。

##### ②手指および学内物品の消毒について

###### (ア) 手指の洗浄・消毒

手洗用洗浄剤およびアルコール消毒液(75%)を設置した上で、30秒間の手洗いとアルコール消毒の噴霧を推奨した。また手洗い場には、食品従事者や医療・福祉に従事する者が行う衛生的手洗いのイラストを貼付した。

###### (イ) 物品の消毒、換気

各教室の出入口付近に次亜塩素酸ナトリウム(0.05%)を設置し、授業開始前に学生自身で次亜塩素酸ナトリウムをペーパーに吹き付け、机上や椅子を一方方向にふき取るようアナウンスし、実施した。また授業と授業の間は窓を開放することも重ねてアナウンスした。

また、使用したマイクやパソコン、シールドに関しては教員が消毒し、共有で使用するコピー機や配布用棚の消毒は職員が消毒するよう作業の分担を行った。

また各授業内においても、動線を確認しつつ、以下の例に挙げたような対策を講じた。

例)・調理実習等では、実習が始まる前までに担当教員が実習台・蛇口、ドアノブ、共同器具(トンゲ)、スマートフォンなど学生や教員の手指が触れる箇所をアルコール消毒液(77%)で消毒し、さらに実習後にもこれらを実施。

・茶道文化の授業は、感染予防対策のため「空手前(からてまえ)」にし、使用後は茶道具を台所用洗剤で洗浄した。洗浄ができないものは、アルコール消毒薬(75%)、あるいは次亜塩素酸ナトリウム(0.05%)にて、消毒を行った。

##### ③手洗い場の設置

コロナウイルス感染予防対策として、手洗いの徹底を推奨しているものの、学内には手洗い場が少なく十分な施設環境が整っていなかった為、校舎の中庭、英語棟通路に2か所簡易手洗い場を設置し、学生の手洗い習慣も定着している。

##### ④一方通行の動線づくり

学内で学生が移動する場合、階段で込み合うことが多いため、上り専用階段、下り専用階段を分け、一方通行化を図った。壁だけでなく、床に進行方向を示すイラストを貼付したことにより、日本人・留学生問わず、スムーズに一方通行ができ、階段のすれ違いによる密を避けることができた。

##### ⑤食堂の座席配置の変更

マスクを外して食事をする食堂の机の配置を一直線上とし、椅子は一つ分の席を空け、全員が同一方向を向くように配置し(スクール形式)、机には学生に正面着席不可の張り紙を貼った。

しかし、食事というリラックスモードで学生の警戒心も薄れるのか、隣席で横を向いておしゃべりしながら食事をとったり、円卓を囲むように密になってくつろいでいる学生も散見され、適宜教職員より声掛けが必要であった。

これまでの研究結果より、顔を向けた相手にかかる飛沫の数を、正面を1として計算した場合、隣席に向けた場合は5倍、斜め前は4分の1であること<sup>1)</sup>、また感染者の実態調査において感染者からの距離が遠い位置にいた人は感染を避けられている<sup>2)</sup>事が分かっている。そのため令和3年度は正面・隣での着席不可を徹底し、斜向かい席にて食事を摂るよう、椅子の配置を変更することとした。

#### ⑥テレワークについて

学生のみならず、緊急事態宣言下では、教職員の勤務にも変化をもたらした。感染拡大防止の一環として、オンライン授業を行う教員は、教室や研究室ではなく、在宅にて配信する事も可能となり、事務局の3密回避のため出勤職員数を減らし、半数はテレワークを行った。

#### ⑦寮の対策について

クラスターが起りやすい集団生活の場である学生寮については細心の注意を払った。

(ア) しいのき寮（個室・トイレ・風呂は2名で共有）については、空室を有効利用する考えのもと、発熱や風邪症状（頭痛、咳、倦怠感、下痢、味覚・嗅覚異常等）が見られる場合は自室で過ごし、健康な学生を空室に移動させた。

(イ) サニーサイド寮（個室・トイレ・風呂は全員で共有）については、トイレと風呂は体調不良者のみを使用する場所を1カ所指定し、健康な学生はそれ以外の場所を使用することとした。

いずれにしても、接触の機会を最小限に抑え、朝食と夕食は個室で喫食できるよう、弁当のみの対応とした。寮生の理解と協力のもと実施できた対応である。

#### ⑧コンテナハウスの設置

学内で高熱、風邪症状（新型コロナウイルス感染症疑い）の学生が出た場合の休養や帰宅までの一時待機場所として、多くの人が利用する保健室は、クラスター発生のリスクを高めることにも繋がるため、コンテナハウス（通称：サニーハウス）を設置した。幸いにも利用者は1名もいなかった。

9月以降は、長崎国際大学がPCR検査指定機関となったこともあり、感染流行地域へ行った学生・教職員、学外実習に行く前の陰性証明を必要とする学生、教職員のPCR検体採取用にコンテナハウスを使用した。ドライブスルーで唾液による検体採取が可能であったため3月末までの検体採取数は、140件であった。

#### ⑨区画内での喫煙促進を一時停止

受動喫煙防止対策として、屋外の一定場所を喫煙区画として白線で囲み、衝立を立てる事を年度当初に予定していたが、喫煙する区画を限定することは、マスクを外した状態で喫煙者が密になることが予想されるため、新型コロナウイルス感染症が落ち着くまで、しばらく保留することとした。

Ⅲ 本学におけるコロナウイルス感染症予防対策の取り組みを振り返り、産業医である長崎国際大学の佐々木教授と本学の安部学長にインタビューを行った。

#### 【産業医インタビュー】

Q1：新型コロナウイルス感染拡大防止対策と学生生活の充実を図ると拮抗する部分があるため、バランスのとり方が難しいと考えています。今後の工夫や改善点を教えてください。

長崎短期大学での学生生活は2年間と短い期間であること、またコロナ感染も当分終息が見通せないことを考えますと、大学としてのスタンスを今一度、学生に周知することは必要と考えます。

大学として、学生生活を充実させたいということが基本姿勢であり、そのためにも面接授業やクラブ活動も復活させたいが、それには学生の全面的な協力が必須である、そのような内容を表明されてはいかがでしょうか。

具体的には、N-CHATの使用を徹底すること、キャンパス内で必ずマスクを着用する、手指の消毒を徹底すること、休憩時間などで会話する時は互いに一定の距離を保つこと、加えて学外では、マスクを着用する、宴会などの開催や参加を控える、極力、コロナ感染の広がっている地域には出向かないこと等、学生が自主的に予防対策を徹底することを再度促す。

学生全員の理解が乏しく感染予防に非積極的であると、コロナ感染が拡大し様々な制限が必要になり、結果的には学生生活が不満足な形で終了してしまうことも、学生側が理解してもらうべきでしょう。

長崎短期大学は学生数が少ない分、足並みをそろえやすいのではと考えます。4月のオリエンテーション等で、大学側より学生生活を充実させてあげたい旨を伝えていただくことで、学生自身が意識を変えることを期待したいと思います。

もちろん面接授業を全授業の中で一定の比率に抑えること、キャンパス内で学生が密にならないように、時間割や登校日を考慮するなどには必要ですが、そのような対策は既にされていると思います。教職員が学生の行動を見て、これでは感染が広がる懸念があると判断した時は、いろいろな制限をかけざるを得ない、そのようなことも学生に周知する必要があります。例えば、N-CHATの利用率に基準を設け、基準以下が一定期間続くと、制限をかけるというようなことも、説明されるのも大事です。

大学側が学生の自主性を重んじ、学生自身が大学のスタンス（学生生活を充実させてあげたい）を理解し、それに応えるべく各自が行動できれば、感染拡大防止対策と学生生活の充実を両立できるのではと考えます。まだしばらくコロナ感染は終息しません。そのような中でも充実したキャンパスライフを過ごせることは、学生の精神的な安定を考えても重要です。

ありきたりのアイデアかもしれませんが、実効性を考えると、一度考慮されてもよいのではと考えます。

Q2：R2年度の長崎国際大学と長崎短期大学の感染対策（取り組みや考え方）等について、違いを教えてください。

基本的には、長崎国際大学と長崎短期大学の取り組みや考え方は同じだと思います。例えば国際大学ではPCR検査を学内で行っていますので、コロナ感染を疑う場合に、対応が速やかです。ただ、少し距離的に離れますが、短大からの要請も受けていますので、その点でのdis-advantageは少ないのではと思います。

またマナバによる毎朝健康チェックの報告が、長崎国際大学では行われていますが、やはり報告しない学生が相当数存在します。このあたりは短期大学と類似しています。国際大学では新学期より、健康チェックの提出を“より厳格に”学生に求めることになり、その効果が待ち望まれます。

#### 【学長インタビュー】

Q1：R2年度は新型コロナウイルスに翻弄された1年でした。

1年前、新型コロナウイルスの正体（感染防止策が不明瞭）がわからない時期でもありましたが、この時期の学校運営についてどのようにお考えだったでしょうか？また、個人的な不安事項等がございましたら教えてください。

長崎県内の大学でコロナ陽性者が早期に出たというニュースを聞き、本学でも出るのではないかと不安であった。今は、学校内での感染拡大は左程ないと認識されているものの、感染拡大当初は、ウイルスの実態が不明であり、予防のために本学でも他大学の対応に倣って年度当初から臨時休校を実施した。この先休校が続けば、短大2年間のカリキュラムを無事終了してすべての学生をきちんと卒業させられるのか不安で仕方なかった。一方、学生や教職員の安全安心を優先的に考えなければならず、どうすれば、安全安心を担保した上で授業が再開できるかを考えた。

自分自身は、感染予防には心がけるが、感染するリスクは皆無ではないと開き直るような性格で、ナーバス

になる必要はないと思っていた。

Q2：面接（対面）授業・オンライン授業のハイブリッド形式で講義が行われてきた時期がありました。4月当初、オンライン配信を決断された時のお気持ちを教えてください。また、学長の立場からオンライン授業の現状での懸念事項を教えてください。

学生に授業を安全に履修させるために、オンライン配信は必須であると判断した。しかしながら、当初は、オンライン配信授業に関する教員のリテラシーには個人差があったので、対応には教員間の協力体制が不可欠であった。また、配信授業への切り替えは、学生の学修成果にどのような影響を与えるのか心配が大きかった。登校できないので学生が孤立することを心配したが、地元出身者が多い本学は学生同士の絆という地域ならではの特色がある。遠方や一人暮らしの学生には、各学科・コースの教員がMelly等を利用したフォローを行ったと伺っている。しかしながら、適応できない学生、心の問題を抱える学生への対応には、コロナの影響で例年以上に難しかったと考えている。

Q3：アフターコロナで、大学が生き延びるためにどのようなことが重要だとお考えでしょうか。

次年度以降、日常の生活がコロナ前の状態には戻るとは思えない。たとえコロナが終息しても完璧に元の生活を取り戻すことはできないという前提でやらないといけない。

本学の良さは、学生と教員の距離の近さと、地域との密なつながりである。オンタイム・リアルタイムで人と接することが、学生の成長につながるため、それがゼロになることは大変つらい。

アフターコロナの中では、「どうすればつながることができるか、みんなで考えていくことが継続的に必要である。都市部の大学では、積極的にオンライン留学等を実施しているところがあるが本学の学生にはなじまない。現場での経験が重要であり、そこで学ぶことに意味がある。本学の学生にとってのオンラインとリアルな学びの適度なバランス（ハイブリッド）のために、教員は知恵を出していくべきである。その前提に「安全・安心の担保」がある。

チャレンジしないと本学の個性を継続し、短期大学として生き残ることはできない。そのためには、ムークス（MOOCS）や放送大学教材等の配信授業アプリの利用は重要である。志願者を増やすためにも、教員のリテラシーの向上、オンライン授業の効果的方法の開発など、多くのチャレンジをしてほしい。

「できないですませるなら何も産み出さない、どうしたらできるかを考えるという発想が大変重要である。

「なすことにて学ぶ。」という考え（教育学者デューイの言葉）があるが、長崎短期大学には、現場で学ぶことを重要視するカリキュラムがある。今年、卒業した2年生に、きちんとこのカリキュラムに沿った学びをさせてあげられたか心配はあるが、今後も学生たちに、現場から学ぶことの意義を伝えることを伝えるカリキュラムを継続していきたい。

最近、変異ウイルス発生の危機が伝聞されているが、ワクチン接種が進めば、初夏ごろからは少しは安心感も生まれるかもしれないが、感染へのリスクが完璧になくなるには年度を跨ぐのではないか。だからこそ、令和3年度は何ができるか考えることが大事である。

リバウンド（第4波）に関しても、感染拡大の社会的要因は止められないので、学内での感染予防を徹底していくしかない。

特に、大学生（若者）の感染の場合は症状が見えにくいので、やりにくさもあるが、今のところ学生へは注意を促すアナウンスを繰り返し行うしかない。徹底できるかは別として、「感染予防対策」を伝え続けることは、大学の役割である。啓蒙、啓発し続けて最後は、学生の良識に委ねることになると思う。学校とは、原理・原則を伝えて、学生の意識を高めていくところであるため、コロナ感染予防対策についても、学生の意識啓発に継続的に取り組んでいくことが、今後も求められる。

#### IV コロナ禍におけるメンタルヘルス

##### ○先生たち、大丈夫かなあ

先天性奇形を持つ子どもの誕生に対する親の反応パターンは、「障害を持つことと悲哀の反応」は反応の強さと時間的推移との関連の中で、悲哀の5段階として周知の事実である。一般的に、1段階・ショック期、2段階・否認、3段階・悲しみと怒り、4段階・適応、5段階・再起のプロセスを経ると言われ、この5段階をかなり長い年月繰り返すと言われている。

この世界的危機場面に人の心理をこの心理プロセスに置き換えてみたが、地球規模、世界規模、日本全体の危機的状況は個人に起きた悲哀のプロセスは似て非なるものであった。

本学は入学式・始業式をした後、コロナ禍の中面接授業ができなかったが、学校は常に開校し、いつでも学生は学校に来れるようにしていた。しかし、コロナウイルスの感染拡大の懸念は強くなるばかりで、通常の一教室に集合して授業を受ける面接授業の見通しが立たなかったため、遠隔授業のFD研修会を通して、zoom授業のスキルを身につけて行った。

そして、4月20日（月）から遠隔授業を開始。

何としても教育の保障と質の担保を図り、学校の社会的ミッションを果たさなければならない。2年生の卒業は絶対に先延ばしにはできない。学科の特性もあり、分散登校・対面授業・オンラインを駆使しながら、段階的面接授業へとシフトし、6月1日（月）から全学面接授業開始となったのだが、その間、「この先どうなるんだろう？」その不安は、エネルギーを奪いそうになる。

私は一部管理職の人を除き、全教職員に何気ない日常のmailを送った。

～川原より、某先生へ～

風もなく春うらら・・・日よりはいいのですが、心が晴れません (-\_-)

学生の様子はいかがですか？

オンライン授業の案配や感触はどうでしょう？

保育専攻2年生の100名を対象にオンライン授業をしましたが、「繋がっている！会えた・・・」と言う思いともどかしさ、複雑でした。

面接授業の価値を再認識し、学校という場所を見直す機会になりました。

何にでも意味がありますね。

グチっばくなりますので、仕事の話はend。

運動不足で1キロの体重増加に伴う脂肪に困っています。

不安は生活の質を落とすものなのですね。

子どもさんたちはどうしておられますか？

みんな大変なんですよ。

先生が〇〇委員長で良かったです (#^.^#)

大変な時の就任ですが、粹に感じて乗り越えましょう！

休みながら。自分の怠けを許しましょうね。

新年度の切り替えがうまくいかず、疲労がみなさん溜まっておられると思います。

「疲れたら、休む」を原則に1日・1日の生活を大切にしようと思います。

zoomの授業は2回目。何かフワフワした感じですが、学生に会えるのは嬉しいです。

いいお天気なのに、心は・・・。みんな同じだからと思いつつ。

打倒！コロナ！負けんぞゆかり！ で～す (#^.^#)

時間があったら、コーヒーを飲みにいらして下さい。

ただのつぶやきでした。～

～某先生から川原へ返信～

おはようございます。



メールありがとうございました。

子育てもあまりできていないのですがありがたいことに子どもは私のことが大好きでいてくれるようです。

コロナでなかなか外出もできないのですが、上の子が丁度花粉症で外にあまり出られないので、いろいろ家でできることに挑戦させています。

最近ちょっとぼっちゃりしてきたので家の中で運動させるようにしました。

テレワークが始まって、家で仕事していると少しでも子どもの様子が見られ、不謹慎ですがコロナのおかげ？です。

落ち着かない日々ですが、少しでも前向きになれるよう、がんばっていきたいと思っています。

いまはとにかく、できることをやっています。

ありがとうございました。～

一部管理職以外の方々とこのような会話を通して不安を共有し、コミュニケーションをとることができた・・・と、当時は思っていたが、日常を語りつつ心の安否確認ができて安心することができたのはまぎれもなく川原の方であった。

## V 各専門領域毎に新型コロナウイルス感染症拡大防止対策の課題を考える

### 1. 心理臨床家の立場から

「民族性や文化的な違い、あるいは歴史的な背景にかかわらず、対話は人々に‘人間の顔’を与えることができる」と宗教指導者のワヒド博士は言う。<sup>注)</sup>

今、新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から人と密になれず、人間の顔を与える対話が奪われそうになっており、さしずめ、対話の形を変えざるをえない状況に追い込まれている。

言うまでもないが、令和2年度はそこはかたなく新型コロナウイルスの脅威におびえた1年であった。2019年12月の中国・武漢市衛生健康委員会が「ウイルス性肺炎」の流行を公式ウェブサイトで発表した時から、「100年に1度の危機」が始まったが、当然、当時は我が事とは思っていなかった。

私は2～3年前から何となく不安感を抱き、この不安感がハッキリしない事に気づいてはいたのだが、それが何であるかは分からなかった。

“何かと先が見えない時代になったなあ、かつては、世の中は努力さえしていればきっと良くなるという希望があったし、科学の進歩は私たちに幸せをもたらし、試行錯誤しながら社会は必ず良くなるという信念があったよなあ・・・”

大きな戦争はないし、暮らしは便利になり生活水準は上がり、価値観の多様化と共に自由になったが、いつのまにか、段々と無条件に未来は明るいという希望を持ってなくなっていると思いだしていた。しかしまさか、この漠然とした不安の正体が「ウイルス」だったとは。

#### 1) コロナ禍が学生の心理面に与える影響は？学生はキャンパスライフを喪失したのだろうか？

令和2年度の在学生のキャンパスライフは学内外の活動はもとより、特に2年生は成人式他、卒業記念パーティ等の催事は延期や中止が続き、活動制限と自粛生活が求められた。教室ではソーシャルディスタンスを取るため隣席との間隔をあけ、休み時間も密になることを禁止した。課外活動やクラブ活動の制限、遠隔によるハイブリット授業など、全ての学生は「本来あるべきはずだったキャンパスライフの喪失」という体験の渦中にあった。

そのような中、卒業式は約30分に短縮。その卒業証書授与式にはほぼ全員が袴姿で出席し、その華やかさの中に思い出作りやキャンパスライフ創りが充分にできなかった切なさがこみあげてきた。

コロナによる個人の被影響性は外からは見えにくい。バックボーンの違いもあり、一人ひとり異なる形で何らかの喪失体験をしている可能性はあったが、保健室に繋がっている学生以外は把握が難しかった。Melly等

のネット掲示板でコミュニケーションできた学生もいたが、私たちには複雑な思いが残る。

しかし、嘆かわしいことばかりではない。ハイブリット授業により遠距離通学生の往復の時間に費やしていた時間の有効活用、また、反復学習のメリット、不登校傾向のある学生の心理的負担の軽減と学習機会の増大、大勢の前では言えなかった学生の意見表明の機会均等などのメリットもあったように思う。しかし、変則的な授業形態に対しポジティブな学生とネガティブな学生のモチベーションの差が教育の質保障に影響したのではないかと思う。学習についてこれない学生へのケアは十分できたであろうか？遠隔授業は自ら学ぶ姿勢のある学生と受け身の学生では学習効果の解離を生んだのではないかと言う懸念があるが、1人でPC画面に向かう学修環境は、何らかの形で多くの学生に内省する時間を与えたと思われる。

～私は何のためにこうしているのか、なぜ、こんな状態になったのか、私はどうしたらいいのか、学校は行かなくていい？行く必要がない？行かない？～自問自答したに違いない。

私たちは、学生の問いに応え、その思いに心をはせたか、私たち教員の授業力はこれでいいのか？～

「学校とは何ぞや」「学校教育とは何か？」この問いかけは地響きのように今も続いている。

## 2) コロナ禍の日常

### ①朝、9時

朝9時になると学園賛歌「しじまや深く世をおおい～♪♪♪あゆみやあわく ちにふるう♪」学生の合唱によるBGMが校内に流れる。風に乗って近隣の方々の耳にも届いていると言う。何気ないいつもの日常である。「さあ、一日が始まるよ、今日も一日頑張ろう！授業開始10分前だよ、ザ・教室に急げ！」など様々な意味があり、根底にある長崎短期大学の愛校心を醸成する 歌詞とメロディに包まれる。

朝9時の学園賛歌が流れなくなり、休み時間の学生の歓声が聞かれず、学校は空洞化した。教職員の意地と根性、熱意で支えられたように思う。

### ②そもそも

そもそも、私たち動物には生きる上で危険が伴うものだが、今なぜ、地球規模の事態が起こったのか、自然を破壊し続けた人類がしっぺ返しをされたと言う学者もいる。レイチェル・カーソン(1960年)は、「世界の経済的、文化的、政治的なもの全てがギリギリのところまできており、必然的に世界が変わらざるをえなくなっている」と述べている。そこに、今コロナの一押しなのか。問題になっている「三密」とは、もともと仏教語で、身密・口密・意密で人間が悟りに達するという非常に大切な段階のことだが、対局に「三断」があり、分断・切断・独断の事を言う。「三密」か「三断」か、私たちはこの先どのような選択をするのだろうか？考える輩と言われる人間は成熟した存在である。敵は品格も哲学も感情も無い「ウイルス」。

### ③生き抜く力

岩岡中正氏は、エッセイ「生き抜く力」の中で、今私たちは、自粛や巣籠もりと言われる「家居(いえい)」の中で、内省し深くものを考えはじめた気がする。今この世界的流行(パンデミック)から学ぶことがあるとすればそれは、私たちの文明の過度な成長とグローバル化への反省であり、人類もまたこの地球上の生きる一生物として他と共生しつつ、しかししっかりと生きていく覚悟やたくましさが必要だということだろうと。

## 2. 教員の立場から

前期のうち面接授業開始後は、比較的スムーズに手指や物品の消毒、換気等を行うことができていたが、後期は慣れもあり、消毒、換気の声掛けを教職員から意識的に行わなければならない状況も多くなってきている。また、雨天時、冬季の換気が不十分であることは否定できない。こまめな換気の必要性について、繰り返し啓発を行っていく必要がある。さらに、学生の手指消毒が十分でなく、形だけをなぞっているだけの場合も多く見受けられる。正しい消毒方法を伝えること、そして徹底・継続していくことが必要である。

また学生の唯一の楽しみとも言える食事の場面も、本来であれば、他者とのコミュニケーションの場であり、ストレス解消や幸福を与えるものである。しかし本感染症流行渦においては、食事中はできるだけ私語を慎み

ながら食事をする、話をするときはマスクをつけること、飛沫が罹らない距離を保つことの意識づけを繰り返し行っていく必要がある。

さらに現在、感染流行地域へ行った場合の対応について、PCRを受検したくない学生は、2週間の待機となるが、就職活動を県外で行いたい場合等に何度も学校を休むこととなり、学生の不利益が大きくなってしまう。そのため、感染流行地域で他者との会食をしないこと、新型コロナウイルス接触確認アプリ（COCOA）を起動させておくこと、事前事後の行動履歴の届けを出すこと等を条件に登学時期を早めるといった対応ができないかと思う。

一方で変異株の流入によって、今後急速に感染拡大が起こることが予測されるため、学生への啓発活動を今以上に効果的に行う必要がある。さらに教職員間でも感染対策に関する温度差があるという声もあり、非常勤講師も含めた情報共有の徹底に努めていきたい。

学校は、学生同士がコミュニケーションをとり、社会性を学ぶ場所であるため、規制をかけることはできるだけ避けたいが、ひとたび感染者が出た場合には、その影響が計り知れない。感染拡大防止を図りながら、学生の学びを継続させる工夫を学校全体で継続して考えていきたい。

### 3. 総務（会計課）の立場から

感染予防が大切であることは理解しているが、対策を講じつつ自分の授業をどう展開してよいのか悩む非常勤講師もいた。そのため、非常勤講師に対しても、感染拡大防止対策や方針を伝えるだけでなく、授業の在り方検討の相談ができるような体制づくりが必要ではないかと考える。

また、教職員の労務環境については、教員はテレワークで授業ができる体制整備が進んだが、職員に関しては、学校事務が学生に関わる業務が多く、在宅でできる仕事には限りがあり、難しかった。また現在ではテレワークが認められていない。それは、学務事務が学生に関わる業務が多く、情報漏洩が不安視されるからであろう。少しずつ遠隔作業ができる環境が整いつつあるが、今後どのようになるか予測ができない。こうした職員の職務形態も今後の課題の一つであるととらえている。さらに、教員については、オンライン・オンデマンド授業のための新資料の開発、授業での学生の密回避のために授業数が増え、休暇が取れない現状もあった。過渡期とは言え、このような状況にも対策を講じる必要がある。

### 4. 養護教諭の立場から

養護教諭と衛生管理者を兼務している立場から、まず「命」を守ることの使命感を痛感した。

安心・安全を追求する中で、どれだけの対応ができるか不安だけが大きかった。1日に何度も厚生労働省や文部科学省のHPを開き、情報収集を必死で行ったことを覚えている。

学校保健の分野において、この新型コロナウイルス感染症に関しては、手洗い、咳エチケット、マスクの着用、手指アルコール消毒、換気、3密の回避を徹底することが、感染予防対策になるため、周知徹底することを目指し取り組んだ。特に、正しく感染対策を行うこと。逆を返すと、正しく怖がるのが大切であると考えていた。4月初めから、マスクの着用は執拗に注意を行ってきたが、学生の中には、平気でマスクを外し、楽しそうに会話をしている人もいた。それを見た別の学生が、「そばに寄りたくない。」「怖い。」と言って保健室に回避する。そのような場合は、どちらにも保健指導を行うが、なかなか手強かった。抑うつ的になる学生が多かったのも事実である。

令和2年度4月から3月までの体調不良による相談の延べ件数は、83件（全体の20.4%）であった。発熱や風邪症状があっても、「コロナ陽性者になったときが怖い。」と言って医療へつなぐことが難しい学生も複数いた。

世論の風潮として、コロナ陽性者が発生すると、様々な場所で嫌悪、偏見、差別が生まれる。長崎県内、佐世保市も例外ではなかった。その差別を防ぐために、私たちが「正しい情報発信をすること。」「身近に感染者が出た場合、憶測で噂を流したり、差別的に扱うことがないようにすること。」「医療従事者、そして感染拡大

しないよう私たちの知らないところで頑張っている人々のために、心からの敬意を払うべきであること。」人としての思いやりがあれば負の連鎖はなくなる。目に見えないウイルスは、とてつもなく大きい敵だと感じた。

しかしながら、今後、「新しい生活様式」に沿って生活することで、自分も感染しない、他人にもうつさない、一人一人の意識の高さや行動が感染者数の増加を食い止めることができる。

私は、これから先も、すべての学生、教職員に対して感染予防対策に協力してもらうよう周知・徹底していく。

## VI 今後の課題

### 1. 今後の大学教育の在り方について

令和2年度は何とか「コロナ対策」は乗り切った感があるが、今後の大学教育はどうあるべきなのか、以下7項目が課題になる。

- 1) 遠隔授業の更なる充実
- 2) 面接授業と遠隔授業をジョイントさせることにより、更に教育効果の高い授業を提供するための創意工夫の必要性
- 3) 遠隔授業による社会人教育の提供
- 4) ICT環境の充実
- 5) 全ての学生にパソコンやタブレットを保有させ、主体的な学修を後押しする。
- 6) 感染症防止対策と並行して、教職員の労働安全に配慮し健康増進につながるような活動を行う。
- 7) オンライン配信に係る教員の労働時間や休暇の取り方にも工夫が必要である。

2018年のノーベル経済学賞受賞者であるスタンフォード大学のポール・ローマー教授は、“A crisis is a terrible thing to waste”という言葉述べている。すなわち、危機的状況から新しい可能性が湧き出てくる。危機的状況は機会（チャンス）を伴うと言う意味である。

大学教育の意味、何故大学教育を受けるのか、自分の人生における大学教育の意義を改めて問い直して、再認識し、ニュー・ノーマルを築く必要があるのだろうと。

### 2. 最後に

歌手玉置浩二さんの「生きていくんだ」の歌詞が妙に滲みる。

♪何もできないで 誰も救えないで 悲しみひとつもいやせないで カッコつけないで 毎日 何かを頑張っているや 生きていくんだ それでいいんだ♪

コロナウイルスを正しく怖がり、いつもあった何気ない日常の意味を知り、自分にできる事は何かを考えるだけでいい。前の日常には戻れない事を嘆くのは止めよう！そして、新たな生き方の「知恵・工夫・力」を模索しよう。「ウイルス」との闘いに勝ち目があるのかどうかは分からないが、ある意味、戦う事は楽しい、そこにはエネルギーと危機に対する一体感が生まれるからだ。毎日新聞のコラム「時代の風」の中で、藻谷浩介・日本総合研究所主席研究員がこう述べられている。「世の中には、“良い一貫性”と“悪い一貫性”がある。剛性（変化に抗して変わろうとしない力）が強いのはいいとして、韌性（じんせい）、変化にしなやかに対応し、肉を切らせて骨を断ち、切り抜ける力もなくしては困る」。そして、宇宙飛行士の野口聡一さんの宇宙からのメッセージ。「陽は必ず昇る。地球は美しい、1つしかない星を守りたい」。去る2月17日（水）から医療従事者を対象にワクチンの先行接種が始まった。地球（ほし）を守る「鍵」は私たちが持っている。

3月26日（金）に2カ月延期されていた「歌会始の儀」に臨まれた天皇陛下が詠まれた歌「人々の願ひと努力が実を結び平らげき世の到を祈る」

私たち全ての願いである。

注) ワヒド博士 宗教指導者 1940年～2009年 インドネシア共和国元大統領

3. 新型コロナウイルス感染拡大防止対策における課題

- 1) 感染予防対策について、学生・教職員へのさらなる周知徹底
- 2) N-CHAT の定着化のための工夫の検討
- 3) 学生の心身不調へのフォローアップ
- 4) 状況に応じた感染流行地域への移動に伴う対応の継続審議

参考文献

1. 坪倉 誠、「飲食店における飛沫感染リスク評価、室内環境におけるウイルス飛沫感染の予測とその対策」、理化学研究所 HP、<https://www.r-ccs.riken.jp/outreach/formedia/201013Tsubokura/> (2021.4.8 閲覧分)
2. 国立感染症研究所実地疫学専門家養成コース (FETP) 感染症疫学センター、「一般的な会食における集団感染事例について」、<https://www.niid.go.jp/niid/ja/diseases/ka/corona-virus/2019-ncov/2484-idsc/9910-covid19-25.html> (2021.4.8 閲覧分)
3. 新型コロナウイルス感染症対策専門家会議、「新型コロナウイルス感染症対策の状況分析・提言」、厚生労働省、<https://www.mhlw.go.jp/content/10900000/000629000.pdf> (2020.4.8 閲覧分)